

## 大原 一興氏プロフィール

横浜国立大学大学院助教授 工学博士 一級建築士

・研究テーマ：研究対象は、『高齢社会の居住環境論並び博物館学』『高齢社会の居住環境計画論』『高齢者・障害者の生活環境』『エコミュージアムに関する研究』『環境学習の為に施設計画に関する研究』『精神保健施設・病院など医療福祉施設の研究』

・著書（エコミュージアム関係）

「エコミュージアム・理念と方法」（編者） 牧野出版 1997

「エコミュージアムへの旅」 鹿島出版会 1999

・学会：日本エコミュージアム研究会（理事・事務局長）、日本建築学会、全日本博物館学会、日本病院管理学会、日本老年社会科学会、人間 環境学会などで活動

・プロジェクト活動

三浦半島エコミュージアム構想 2000年より

杉並区都市計画審議会委員 逗子市公共建築物福祉適合検討委員長

・ホームページ：<http://www.landscape.ritsumeai.ac.jp/jecomms/index.htm>

## 『エコミュージアムとは何か』

大原一興（横浜国大） 2002年1月18日 於セッション

杉並に生まれて長く住んでいます。建築分野の研究をしています。全国的に、地域に目を向ける風潮があることを学生のころから感じていて、研究テーマも専門性の高いものを目指すのではなくて、総合的なものとか地域に目を向けたものが大事だなと前々から考えていました。

エコミュージアムというものに出会ったのは10年くらい前ですが、しかしそんな長い間研究しているわけではなくて、建築の勉強を進めていく中でこれに出会ったということです。

まず最初に言い訳をしておきます、これからエコミュージアムとは何かということの説明しますが、今日の話が終わっても「何か」ということはおそらくわからないと思います。実は私自身も10年くらいこのことについて勉強しているのですがまだよくわからない。わからないから面白いというところなんです

ね。  
エコミュージアムというのは知識ではなく実践の活動とか生活の中から感じ取っていくものだという事はなんとなく分かっているのですが、そういうことも知識で分かるのではなく、やはり何か活動してみないと分からない。そんな点がエコミュージアムでは大事な点なんだなと感じながらいろいろやってきて、地元杉並でこういうエコミュージアムというものを考え始めるチャンスを狙っていました。

今回区民大学の講座のテーマが「地域に学び地域を作る」ということで、これからお話ししますが、エコミュージアムの本質的な部分がまさにそうなのですね。地域を学んでそして自分たちで地域を作っていくということ、それがエコミュージアムの一番大事なところなので、それにぴったりのテーマなのかなと思います。

この区民大学に参加している方の中にも関心をもっておられる方がいるということで今日こういう形で話をする機会が実現できました。今日2時間で大体把握できるかというところまず無理だろうということをお話ししましたが、実は地域によってエコミュージアムのあり方は全然違って来るものなのです。だから杉並型のエコミュージアムというようなものをこれから造っていくということを考え、それを念頭において今日は前段の話をしたと思っています。今日の時間の中ではおそらく杉並でどういう活動ができるかという話まではいかないと思っています。

今日お集まりの皆さんの中でエコミュージアムという言葉自体がなんだか分からないという方がかなり多いと思います。聞いたことはあるんだが、人によって言っていることが違う、本当はどういうものなのかよくわからない人もたくさんいると思います。今日はエコミュージアムの入門という形でお話をしたいと思っています。

入門も人によっていろいろな説明の仕方があってこれは一つには私流の説明の仕方になると思います。エコミュージアムへの入り口というようなところがなんとなく理解してもらえれば良いと思っています。ですから今日の話の目標は入り口がなんとなく見えるくらいのところで終わると思います。

資料は「エコソフィア」という雑誌がありまして、昭和堂という出版社から出している雑誌なのですが、その特集のときの記事です。こういうものはいくつかありますので、興味を持った人は是非本やなんかで調べてみていただくといいと思います。今日の資料にもデータの部分とか細かい部分は書いてありますので、これを読んでいただきますと少しずつどんなものなのかということがわかってくるのではないかと思います。

今日話をする内容は、最初にエコミュージアムとは何なのかということをお話して全体の概念みたいなものをつかんでもらって、その後スライドを少し用意していますので見ていただきたいと思っています。

日本では現在あちこちでエコミュージアムの名前を使っているいろいろな活動が出てきていますが、残念ながら成熟したエコミュージアムというものはまだほとんど見られない。スライドでお見せするのはすべて海外の事例になってしまいます。むしろ遠く離れたところでどういう活動をしているのかということのほうが杉並で展開するとき、参考になると思います。まねをするのではなく、エ

エコミュージアムというのはその地域でそれぞれのやり方を築き上げていくことになると思います。

(1) エコミュージアムにおけるエコとは  
さて、エコミュージアムとは何かということの説明のしかたがいくつかあります。

エコということば自体が一種はやりのことばですのでエコミュージアムとはなにか新しい、環境にやさしい博物館なのではないかとか、環境をテーマにした博物館ではないかと思ったりする人が多い。または、ある一定の自然環境みたいなものを保全してそこをまわりの人が訪ねて、そこに咲いている花とか生きている生物を観察して帰るといった自然生態園というものをイメージする人もいるかと思えます。

しかし海外で、また日本でももちろんそうですが、エコミュージアムといわれているものの本質はむしろそこに住んでいる人たちがどう関わっていくかということが重視された概念です。対象としてもいわゆるエコロジー、エコということばがつくと自然環境、いわゆる緑であったり、もう少し広げて例えばリサイクルの話とか、地球規模の環境の話というようなことで、環境に配慮するときのいろいろなテーマを扱うというふうを考えられがちですけど、このエコミュージアムというエコとはもう少しエコロジーの語源にさかのぼって考えているんです。語源にさかのぼると、ギリシア語のオイコスということばになるのですが、そのオイコスということばは実は家とか家族という意味なのです。

家族とか家というモデルは、半ば閉じた一つのまとまりの中でそれぞれの構成員が家族の一人一人としてお互いにいろいろなことをやりとりしながら一人一人が成長しつつかつ全員が家として家族として成長していく、展開発展していくという姿です。このモデルをもとに、生物学の中で個別の人や物や生物が関係を持ちながら発展し成長していくというような概念がエコロジーということばで表現されてきたわけです。ですから家とか家族をモデルにしたことばとしてはエコロジーのほかにオイコノミー、エコノミー（経済学）ということばも生まれてきています。一つの家族とか家というような中でそれぞれ構成員がお互いやりとり、交換をしながら、それぞれが得をしたり労働を提供するなどしながら、全体としてより豊かな生活に発展していくという概念がエコノミーです。そういう意味ではエコロジーとエコノミーは語源が同じであって似たような仲間です。その辺に立ち戻ってこのエコミュージアムというものを考えましょう、というのが本来使われているエコミュージアムの意味なのです。

ですからいわゆる生物学で言われるエコロジーだけではなくて人間の生産活動とかも含めていると思ってください。英語ではヒューマンエコロジーということばがあるのですが、ヒューマンエコロジーというのは人間の生活や文化、社会との関係とか、人間が周りの環境とどういうふうに関わりを持って発展してきたか、生活をしているかということ表現する言葉です。このエコミュージ

アムで対象にするのはそれに近いものだということが今までのエコミュージアムの考え方では定説になっています。

今言った説明はどういうことなのかといいますと、エコミュージアムの対象は自然環境だけではないのだということを言いたいのです。人間の生活に関わるものも人間の生活が作り上げてきた社会とか文化とか風習とかそういう歴史に関して、あるいは産業というものもそうなんですが、そういうもの全てを扱っていき、全てを扱うことによって総合的な環境というものが見えてくるはずだということなのですね。自然環境だけを特化して見ると、その中にももちろん生物同士の関係性というものも見えてくるはずなのですけれど、それだけではなくさらに人間との関係で、生きていない建物など無機質の物体に関しても取り上げていこうという、風呂敷が広い概念なのです。エコミュージアムで取り上げているエコという言葉は最初からわかりにくい概念だということを知り返していますが、でも実際は人間の生活とか地域とか環境とかいうものはそもそもすごくわかりにくいものです。

いろいろなものの中には詰め込まれていますし、一個一個がわかったからといって全体を把握できるわけではない、そういうものが環境であり、家とか家族というものでもあるわけですし、エコミュージアムで対象とする「地域」というものでもあるわけです。そういう壮大なというか漠然とした目標を持っているのがエコミュージアムであるということをもっと理解していただきたいと思います。エコということばの説明は以上です。

## (2) ミュージアムとは

次に、ミュージアムというのはもちろん博物館のことですが、福沢諭吉が博物館という日本語にしたのですけれども、今日本にある博物館にはいろいろなものがありますから、本当に博物館が目指しているものが何なのかがちょっと分かり難くなっていると思います。

今すでに日本にある博物館というものを固定的に考えないでもらいたいのですが、博物館の基本的な役割とか機能とかそこで行われる活動には、3本柱があって、その3つがうまく連関しながら繰り返し活動されていくという考え方があります。

ミュージアム、博物館という言葉には“館”がついていますのでどうも箱物、ビルディングの形を思い浮かべてしまうのですが、これは実は内容によって定義されているものなのです。

まず(1)調査、研究というのがあって、(2)その対象となるものを集めて保存したり、保全する、それから、(3)展示をして教育、普及をするという3つの内容が博物館として重要な内容なんです。

先ほど言ったエコというものを対象にして博物館活動をしていくことがエコミュージアムということばの意味なのですが、エコということ、つまり全体性とか生物学、経済学を含めたような家とか地域全体とかそういうものを対象と

して調査をして研究をし、モノやコトの収集をしたりそれをよりよい形に保存したり、よりよい形に変えていくという意味での保全をする、さらにそこで集めたものとか調べたものに対してこれを一般の人に知らしめるために展示をしたり教育をするというような一連の活動です。

一般の人が博物館ということからイメージするのはおそらく展示ということだけなんじゃないかと思います。それだけではないにしても一般の市民との最も強い関わりから言えば一番身近な存在が展示という行為だと思いますが、実は展示というのは広い意味での教育普及の中の部分です。展示をしなくても出版物にしてその考え方を広めることはできるわけですし、広い意味で教育普及の中の一部です。

もう少し言うと博物館というと何か古臭いものがそこにあるのじゃないかとか、すでに役に立たなくなったものが博物館に眠っているというようなイメージがあると思います。そういうのは収集であったり、保存という内容がそこに強くイメージされるわけです。しかしそういうものが集められたり、よりよい形で残っていたりさらにその内容について一般の人がわかりやすいように説明をしてくれるというのは誰がやっているかということ博物館の職員である学芸員がやっていて、その学芸員の仕事は博物館の資料に関してさまざまな調査をしたり研究をしたりしないといけないわけです。そうでなければそれが展示できませんし、どういう形で保全したらいいかということも理解できません。

### ( 3 ) エコミュージアム活動の 3 要素

このミュージアムとしての 3 つの柱が大変重要で、これを地域全体で展開していこうという考え方がエコミュージアムということです。地域にあるさまざまなものを調査したりそれをよりよい形で保存していこうと、さらにそれが広く皆の理解を呼び起こすように展示をしたり、ガイドブックを作るということも含めて教育普及という活動をしていく、それによってまた知識が広まってさらにもっと深い調査なり研究をする、さらにまた別のものを集めたり保全したりする、さらにそれを見せることによってさらに広範な教育ができるようになるというようなこの繰り返しですね。

この 3 つの柱が繰り返されていくというのがミュージアム、博物館という活動になります。それが実は今まで博物館という “ 館 ” という箱物、建物の中で閉ざされてやられてきた、それが建物の中でやるのはつまらないじゃないか、むしろ地域に出て行って地域全体で活動をやっていく、そのことによって地域全体が屋根も壁もない博物館になるという考え方なわけです。もう少し説明をしたいのですが、そうすると従来の建物を中心とした博物館とエコミュージアムとの違いは何なのかということの説明します。

これはこのレジメにも書きましたし、雑誌のコピーの表 1 にもあるのですが、右下に博物館活動の 3 要素と書きました。それと従来の博物館という絵が載っています。これが従来の博物館とエコミュージアムとの違いをうまく説明した

ものとしてよく使われているものですが、表の1を見てもらうと博物館活動にはどこでやるかという「場所」があって、博物館の「対象」とする内容があって、だれが関わるかという「人」がいるという3つの要素があると思うんです。従来型の博物館はまずがっしりとした建物があります。博物館建築という建物があって、中で全てのことが殆ど行われるのが通常です。それに対しエコミュージアムでは領域で活動が行われます。テリトリーという言葉で領域と直訳しているのですが、領域というのはある一定の範囲の地域と考えてもらっていいと思います。だから建物の中に閉じこもるのではなくて、建物の外側に出て壁のない博物館を造っていく、ある地域全体を博物館として活用していくという考え方です。

2番目の内容、対象に関しては従来の博物館はもちろん収集という、物を集めることになります。それに対してエコミュージアムは建物の中にそういう切り取った物を持ってくるのではなくて、その地域にそのままの形で遺産として残しましょうと、遺産ということばも直訳ですけども、たとえば、よく飛んでいる蝶を捕まえて標本にして博物館に展示するという方法が従来の方法ですね。それに対してエコミュージアムでは何をするかというと蝶が飛ぶということは蝶が生息するための環境が整っていなければならないのだから、環境全体を蝶のためにその場所で残しましょうということになります。蝶は生きて飛んでいてはじめて蝶の生態を見せてくれるのですから、捕まえてきてコレクションとして標本にするのではなくて、生きている蝶がいる環境全体を保存しましょうと、そのことによってその蝶は生きて動いていることが理解できるという考え方になるのです。

物は集めて環境から切り取って持ってくるのではなくて、環境全体をそのままの形で残す。それが遺産という考え方なのです。

そうすると、今まで博物館の中に持って入れなかったものをその地域におけばいいということになれば、博物館の対象がどんどん広がっていきますね。たとえば建物、住宅とか一つの大きな建物なんてものは博物館になかなか持って入れない。ただ最近、明日か明後日までですが江戸東京博物館で東京建築展をやっていて、博物館の展示室の中に建物を再現するなんてことも部分的にありまして、それから移築して保存して建物園というところで見せているなんてこともあるのですけれど、そういうのは現地でそのまま残せばいいじゃないかという考え方が基本的にエコミュージアムの立場です。ある敷地に持ってくるのではなくて、もともとそれがあった場所にそのままの形で遺産として残すというのがエコミュージアムの考え方だと言えます。

#### (4) 記憶を集める

それから一つエコミュージアムで使われているキーワードで記憶というものを集めましょうというのがあります。これは少し難しい概念になりますけれど、記憶を集めるとはどういうことかといいますと、物自体を集めるんじゃないくて、物を通じて人間がそこにどういう思いとか、そこにどういう関わりがあっ

たかということを残しましょうということなのです。

記憶を残す・これはすごく難しいことなのですね。たとえば博物館に古いラジオが展示されていることを想像してみましょう。昔そのラジオを使ったことのある人にとっては博物館に行ってそのラジオを見るとラジオで聴いた音楽や、ニュース、または、大事なニュースを聞いたあの日のこととか、そのときの天気とかいうものが記憶としてよみがえってくるわけですね。ラジオを使ったことのない若い世代の人達や子供達はそれを使っている映画を見たとかそのラジオを使ったことのあるおじいさんの話を聴いたというようなことをそのラジオを見ることから想像して、自分の経験の中からそれとの接点を結びつけていくわけです。

このエコミュージアムで大事にしたいのは物にはそもそも記憶を引き出すためのきっかけの価値しかないのではというような基本的な考え方があります。物を残すことは大事なわけだけれど物自体にそんなに価値を認めるんじゃなくて、物に関わる人々の生活であったり、人々の歴史とか人々がそれを見て何を感じとれるのかという人間の心に跳ね返ってくる気持ちのほうを大事にしたいということがエコミュージアムでは言われていることです。

具体的にはどういうことかといいますと、地域社会には、風習とか習慣とか歌とか踊りなど無形のものたくさんありますが、そういうものも物と同等の価値を認めましょうということになります。これはヨーロッパの博物館が今まであまりにも物に価値を置きすぎて、その結果どうなったかということ結局博物館に置かれる収集品が宝物ばかりになってしまった。つまり希少価値とか高価なものであったり人が持っていないものであったりというようなところに価値を見出すようになったのですが、エコミュージアムは何かというと、例えば隣の町にもあるような神社、鎮守様とかというようなものが、これは日本で一番の神社ではないかもしれないけれども地元の人たちにとっては極めて価値が高い、毎年そこにお参りに行くとかお祭りに行くとかそういうような価値の高いもの、自分たちの記憶の中で一番大事にするべきもの、それは地域の人たちにとって価値が高いもので隣の町の人にとってはなんでもないことなのですから、そういう価値を大事にしましょうということなのです。それが従来の博物館ではいろいろな町の神社を比較してどれが一番立派かとかお金がかかっていたかとか珍しいかとか言うようなことで判断することになるのですが、エコミュージアムで大事にする価値は地域の人がいかにその物に対して、建物とか場所とかに対して気持ちが入っているかということなのですね。そういうものを内容として対象としましょうというのがエコミュージアムの考えです。

それともう一つ。誰がそれに関わるのかというときに、これも決定的に普通の博物館というのはまず専門家、学芸員がいろいろなものを展示する、研究をしてその成果を展示するわけです。あるいはガイドブックとかカタログを作って大勢の人にわかるように見せる。で、それに対して入館券とか観覧券を買ってというような形で観覧者がお客さんとしてやってくる。内部で作り上げたもの、人に見せようと思って作ったものを、見せてもらおうと思う人が外から

やってきて見る、という関係になります。これは博物館の内部の人と外部の人がはっきり違う役割を持つわけです。はっきりとそこには壁がある。

ところがエコミュージアムではそれをどうしようかというとその両方を地域に住んでいる住民がやってしまおうという考え方なのです。

これはすごく難しいことなのですが、実際にはある地域に住んでいるときには、素人ながらも皆何かの専門家なわけです。たとえばその地域に住んでいる人の中で、身近な例では垣根とか植木に詳しい人がいたとする。そういう人は単に植物学者とかいう専門学者とは違ってその地域に生えやすいものとかその地域に発生しやすい虫とかをよく理解した人なわけです。植木の手入れを年中している人は植木の専門家であるわけです。素人ですが専門家で、しかもその地域に住んでいてその地域のことをよく知っている専門家なのです。そういう人が地域の中にはたくさんいるわけです。そういう経験とか生活というようなものの中から積み重ねられた知恵というものを、たくさんの人が地域の中で貯えている。その人たちが少しでも自分の専門的な知識を他の人に分かるように伝えれば、それだけで、その地域の中でもう博物館が成り立っていくということになります。

実際に専門家はたくさんいます。専門の種類がたくさんあって、ある人は花について詳しい、虫について詳しい、虫の中でも蝶について詳しい人もいればトンボについて詳しい人がいるとか、とにかくいろんな専門家が地域にはいるわけです。自然環境だけではなくてこの辺に住んでいる人の飼っている犬とか猫に詳しい人もいます。どういう名前でもだれだれさんのところで何時くらいに散歩して、なんていうことがわかったりする。そういう犬の専門家もいれば、その地域にずっと住んでいることだと、その町並みの変化だとか住宅がどういうふうになってきたか、だれだれさん宅は建てて何年くらいだからそろそろペンキ塗り替えをすとか建物について詳しい人もいるかもしれません。あるいはそれは半分専門家で大工さんだったりするかもしれない。でもとにかくいろいろな分野の、地域の中に存在するあらゆる専門家が自分たちの専門性というものを別の専門家に話をする、何かの形で伝えることによって学ぶべきことはたくさん世の中に存在しているということです。

#### (5) 住民が専門家、知識を共有

そういうものをお互いに自分たちの得意なもの、知識だったり物だったりするのですが、そういうものをお互いに共有していきましょうという考え方がこのエコミュージアムになります。ですから住民自体が専門家になり、かつ教えてもらう立場にもなる。時と場合によって教える立場になったり教わる立場になったりする。そこには一切壁がないわけです。

外の人、中の人という壁がなくなって自分がどっちの存在にもなりうるんだという考え方、これがエコミュージアムの考え方になります。ということで従来の博物館活動を乗り越えてさらにすばらしいものにしていこうという意図で、こういうことが発想されたのはおよそ30年ほど前になります。ですからそんな



に歴史があるわけではないのです。

この30年くらいにヨーロッパの方でいろいろなエコミュージアムのこういう考え方にもとづく実践がされてきました。今言った表1に關係しては図1でそれがもう少しわかりやすく書いてあると思います。この図の中で高齢者と書いてあるのはいわゆる町とか村にはお年寄りがいて、お年寄りはその地域における物知り、つまりの一種の専門家であるという考え方です。

遺産、地域特性、地域住民、記憶の収集、その辺がエコミュージアムのキーワードになります。ちょっと抽象的な話ばかりで、では具体的に何なのだろうかということがわかりにくいかもしれませんので、ここでスライドで海外の事例を見ていただいてどんな活動が具体的にされているのかをご紹介しますと思います。

これから紹介する内容はある1箇所のエコミュージアムではなくて、数箇所のエコミュージアムの部分を切り取って紹介しています。

どういう順序で紹介するかといいますと、まず調査研究としてどんなことがされているか、収集保全活動として何が、それから展示・教育・普及ということで何がという3つの分類でシャフリングしてスライドを持ってきました。

では見ながら説明をしたいと思いますが、最初に調査研究でどういうことがされるかということです。

これもたくさんあるわけですがたとえばこのエコミュージアム、これはスウェーデンの例ですが、ある運河がありまして、運河周辺の地域がエコミュージアムになっています。

そうすると運河の周辺を調査しないといけない。調査をしてどういうものがどこにあるか、周辺の環境がどのように変わってきたかということ調査する。エコミュージアムで大事なのは誰か専門家がやるわけではなく、これを住民が中心になってやっていくことなのです。ここではどういうことをやっているかと言いますと、一種の住民と考えていいと思いますが、運河で儲けている運河の会社がありまして、そこが船を出してくれるわけです。地域のいろいろな人が、セミプロの人、興味のある人が、ある日運河の調査隊に出かけるという形になります。中では最近の運河周辺の環境の変化のレクチャーなんかもやりながらここに乗り合わせている人たちは、広い地域なのですが地域の人たちが中心です。そして地域の行政関係の人、学校の先生なんかがこの形で調査隊にでかける。実際には目で見て点検し、ディスカッションしながらこの周辺の環境の変化や水質とかを調査していく。それをサポートする専門家、科学者は別にいるわけです。調査活動自体は住民がして、その活動を支援するのは民間の企業になります。

普段この地域で稼がせてもらっているこの運河の会社が船を出してくれるというような関係になっています。誰かが主体的にやる、あるいは行政が何かを主導して税金を使ってやるというのではなく、自分たちが少しずつできることを発揮しながらお互いにみんなが共同して作り上げていくという考え方です。

いろんな事例がありますが、エコミュージアムというのは、日本では殆どそんなのですが、ともすれば博物館ごっこに陥ってしまうことがあって、あまり学術性のないものも結構あります。しかし、このフランスのエコミュージアムではきちんと財産目録、資料目録を作っています。これは博物館の原則、鉄則ですけれども、資料の目録を作るのは当然のことで、そのためにはいろんな調査をして台帳にその地域にある建造物、いろんな物、民間の伝承事項、歌、踊り等いろいろなものが記録として書かれています。また常にこういう調査とか研究が進められている。これは先ほど言ったように住民の参加による調査活動であったり、それをサポートする専門的な職員ももちろんいるわけです。この専門的職員は大学とか研究所の研究者であったり企業の研究所の職員であったりという人が少しずつ自分たちの労力をだしながらその地域のあり方を考えていくというのがエコミュージアムのやりかたです。

この写真も各地で行われる町とか村の学習会というようなことになりますけれども、これもスウェーデンの例ですが村の学習会を開いています。学習会で案内をするのは住民の自主的なガイドさんです。住民のガイドとは村の歴史とかに詳しい人がいてそれを紹介したいと思っている人も結構いるわけですが、それだけではなくむしろ自分自身が新たに歴史を勉強したいと思う人がいてその勉強の方法としてガイドの研修を受けることもあります。そういう勉強会、町の学習会を頻繁に行っています。特に歴史的な村の場合、ここも昔鉄を造っていた村ですので、鉄の歴史や産業の歴史に興味がある人というのは、どこの国でもそうですが大体はリタイアされた年配の人が多いい。ここではたまたま左端に若いカップルがいますが、若い人も結構参加しているのがよく見られます。若い人はなぜ参加するかといいますと実はこの人は大都市で会社勤めをしていたのだけれど、そういう生活がいやになってきて自分の生まれた故郷の村に帰って何かしたいと、ところがこの村には自分が仕事を始めるときに何が必要なかがよくわからないということで、まず村のことをよく知って自分に最適な仕事を見つけないということで学習会に参加しているわけです。

これは97年ですから4年以上前に撮った写真ですがそのときそんなことを言っていました。そうしたら翌年この夫婦が村にITカフェ、インターネットカフェというのを作った、というニュースが伝わってきて、よくやったなと思いました。その地域で求められているものが何なのかということ、こういう学習会を通じて自分一人で考えるのではなく、皆と、学習会の仲間と、地域の人と相談しながらそういうものを発見していったわけです。このように1年を通じて学習会とかディスカッションというものがあちこちの地域で行われています。

エコミュージアムというのはそういう一個一個の地域のいろいろな活動の集積で、ある一人の人とかあるひとつの考えを持った人が全体を統括していること

はまず無理な話なのです。ヨーロッパで成熟したエコミュージアムの場合はスタッフがいろいろありますが、その中心的なスタッフは何を仕事としているかというと、地域の各地で行われている大体アフターファイブの夕方の会合ですけれども、あちらこちら出かけて行ってあちらではこうしていた、こちらではこうしていたと情報をつなぎ合わせていく、それぞれの地域で行われている会合にアドバイスをするというような役割をエコミュージアムの中心的なスタッフはしているわけです。基本的にスタイルは一個一個の地域で行われている地域の学習活動であり、調査研究であり、なにかを保全する活動であり、そこで定住したりガイドブックを作ったり、出版物を作ったりというような一個一個の地域、グループをつなぎ合わせていくというのがエコミュージアムの活動です。これはだから建物にとらわれない、拠点にとらわれないものがエコミュージアムですから、要するにネットワークなのです。

調査研究の別の例で言いますと、これはベルギーのエコミュージアムですが、右側の建物、これは一目で駅ということがわかります、今ここは鉄道が走っていない線路になっています。この廃屋になった駅を活用して、ブリュッセルの大学がここを借りて環境研究所を作っています。この地域の環境研究所をこの場所で展開している、その大学とこのエコミュージアムが一体となって今この地域のエコミュージアムを運営しているわけですけれども、このようなかなり専門的な研究所もエコミュージアムの一部として位置づけられているところが結構あります。地域によってはたとえば民間の農業研究所がエコミュージアムの一部になっている。そういう事例があちこちで知られています。調査研究活動は熱心にされている。次の事例も、これは調査研究と言っていいのかわかりませんが、フランスのある村の山の上に14世紀ころの城の跡があります。その城跡を丹念に研究する郷土史愛好家があります。この郷土史愛好家が自分たちの足と頭を使って一生懸命山城にどういう村があったかというような事を自分たちで作る、この絵も素人たちが描いた絵で、専門家が学術的に実証するような学術的信憑性からはだいぶ離れていますが、学術的な裏づけが得にくいようなこういう場所では市民が自らこういう活動をしてそういうものを絵にしている。自分たちの勝手な想像が入っていると思いますけれどもそれでもこういった活動に熱心に参加する。このことがあるいはいつの日か専門的な学術機関がここに価値があるとして入り込む可能性はあるわけですが、先ほど言ったようにこのような昔の村というのは結構あちこちにあります。ですから自分たちのものがほかと比べてそんなに価値があるかどうかはあまり関係ない。自分たちにとって自分たちの村のものがやはり価値があるのだということで勝手にこういう行動を起こす。これが大事な考え方ではないかなと思います。こういう調査研究を勝手に自分たちでやってしまうということです。勝手にやるとついつい学術性の担保ということが問題になったりしてきますが、そのあたりは細かいところで専門家がチェックをするということです。

《スライド》この建物は世界遺産になっているもので、エコミュージアムの一部としてあります、その中で細かいところのチェックは専門家が関わってちゃんとサポートするような形をとっています。

また、これは見たところただのオフィスですが、フランスの都市部にあるエコミュージアムの事務所なのです、ここでは調査研究活動をかなり力を入れてやっています。なぜかというとな新しいニュータウンなのです。日本でいう多摩ニュータウンとかの都心の近郊のニュータウンなのです、そういうところで昔何もなかったところが新しく開発され団地が造られた、その団地を造っていく過程を今住んでいる人にきちんと理解してもらいたいと、エコミュージアムが最初は研究所として発足しました。今はその地域の「生活の博物館」という呼び方のエコミュージアムになっています。

ここでは、これは実際には昔そこに農業をやっていた人とかいろいろな人たちに写真を集めてもらって、昔どうだったかという資料を一生懸命集めてやっています。そういうのは主に出版物であったり、近代化に伴ういろんな写真というのが主なコレクションになっています。そういうものを収集してそれが現地でどういう形に変わっているのかということをつタウンウォッチングのようなものを中心に活動しているようなところなんです。都市部で展開するとそういう方法もあるということです。

次に、これはノルウェーのエコミュージアムですが、ここも大変資料がそろっているところです。この地域固有の資料です。しかも研究スタッフがいてエコミュージアムの中の文書センター、図書館みたいなものですがそこに保管されている資料、1個1個のファイルは実は1個1個の家の農業の記録がぎっしり詰め込まれたファイルなのです、そして殆どが個人名のファイルになっています。だれだれさんの農園というのが一つのファイルなのですが、そこでどういう子供が生まれてどこに嫁に行つてとかそんなことが細かく書かれてフォルダに入っているというような情報です。日本ではどういうところがこういうものを持っているのかというとなありえない話ですよ。結局行政でも住民台帳なんかを持っているのですがそれよりずっと密度の高い情報をこのエコミュージアムは持っています。

これは未だに、当時の、もちろん現在の変化も記録していくのですがどんどん昔を掘り起こして資料を集めています。教会の洗礼を受けた人のリストとか昔の新聞とかそういうものを題材にしてかなりいろんな情報を集めています。そのとき力になるのは住んでいる人からの情報提供です。これは専門家が一人で歩き回つたつあるいは何年かかつてもなかなか聞き出せない、これは住んでいる人たちが自らこういうものがあつたということをつこういうところに気軽に持ち寄れるような体制がないとエコミュージアムとはなかなかかなりにくい。これが敷居の高い古典的な博物館との違いです。

次は収集保存の話をしたいのですが、保全とか保存といったら、エコミュージアムで考えつくのはまず生態系の保存ということです。ここなんかも湿地帯全体を保全するというエコミュージアムになっています。一つの湿地だけではなくて、その周辺エリア、湿地を中心としたエリア全体、この場合はある川の河口部全域を対象としたエコミュージアムになっています。同じエコミュージアムですけどコウノトリを保護し繁殖をしているそういうセンターもエコミュージアムの一つのサイトになっています。エコミュージアムの部分というのはすべてエコミュージアムが所有しているわけではないのです。それぞれの部分で活動しているグループがいるし、それぞれがそれぞれの方法で保全したり、調査研究をしたりしているわけです。エコミュージアムはそれをお互いをつなげるという役割、ですからこのエコミュージアムの一つの部分としてのコウノトリ保護センターは、この地域のいわゆる野鳥の会のような自然保護協会のようないくつかの団体が共同して設立した保護センターなのです。それが同時にエコミュージアムの一つの部分になっているということです。エコミュージアムだからこそできると考えられることは、先ほどのコウノトリ保護センターは一つのケージがあって研究員がいるという一つの場所に限りがちなわけですが、実はこういう地域に屋根の上にコウノトリが巣をかけられる、いわゆる巣掛け台を周囲の農家に作っている。エコミュージアムのスタッフが農家にいろいろ交渉して自分たちでこういうものを作りませんかということ呼びかけて、地域の人たちが皆そのような気持ちになって屋根に巣掛け台を作ってくれるということです。こういうようなことが地域のそれぞれの家々が自分たちが自らやれるようになっていくわけです。とにかくいろんなものが保存できるわけで昔の古墳なんかもありえます。

収集保存という概念をさらに膨らませて考えていくと、保存、保全というものは結局先ほど言いましたように物だけを保存するのではないんだと、新たに生産していくような行為とか経済的な営みまで含めてそういうものを保存していくというのがこの幅広いエコミュージアムの考え方に入ってくるのです。ここにあるのは古いワインではなくて、現在も生産されているこの地域の地場産品ですよ、地場産業で造られたもの、その生産品も一つの展示物として見せることができるわけです。ここで保存されているのは何なのかというところの地域にあるもともと成り立っている環境を生かした一つの産業の営みを保存していることになります。物自体ではありません。物はその営みの生産物ではない。けどこの物を見ることによってそこで営まれている行為が記憶としてよみがえってくる、そういうところに重きを置いて考える、これがエコミュージアムの考えですから、古いものだけでなく今年取れた新種とかそういうものも展示品になるし、同時に展示即売品という形にもなってくる。

時代も場所も前後しますが、これも北欧の例ですがこれはなにかということ、誰もこのころのことを知らないバイキング時代の住居を復元しているところで

す、古代住居を復元するというようなこと、これも保存、保全の概念の範疇に入るものです。新たに復元する、復元の仕方はそこで使われていた材料を使い、そこで行われていた工法です。出来たものは新しい物ですけども、ここで保存しようとしているのは作りかたであり、造るときのいろいろな知恵ということですよ。

こんなことをするのもエコミュージアムです。それから水車ですが、実は水車を作りかけているところですよ。これは古くなって朽ち果ててしまった水車を復元しようという住民グループが自分たちでお金を出し合って基金を作って、これだけお金集めたのだから自治体も補助をしてくれとかかけあって、自治体からお金をもらいそこでできたもので材料を買って、それからエコミュージアムの方から頼み込んで実際に水車を作る専門家に来てもらって指導してもらい手作りして今住民たちが作っている水車です。そういう保存の仕方もあるということですよ。復元とか再生をするようなこと、それが保存の一つですよ。

この写真は古代の風景を保全しているというふうに説明を受けましたが、見ただけでは何かわからない。この今、風景を保存すると言っていたエコミュージアムは、ノルウェーとスウェーデンの国境を保存するという国境をテーマにしたエコミュージアムなのですね。これがすごいなと思うのは、どういう地域を対象とするかはエコミュージアムがそれぞれ設定していいわけですよ。

ここの設定は国の境、国境ということなのですね。国境というのは面白いテーマで、もともと同じような地形とか自然環境の中で、同じような民族が住んでいたところで政治的な線引きがされたということをしっかきにして、だんだんと近代に至る過程で生活、政治、風習それにことばなんかも変わってくるわけなのですよ。それによって現在はノルウェーとスウェーデンの2つの国があるのですが、実際は同じような環境なのだと。それが現在の自分たちに至るまでにどういう過程で変化してきたのかということをお自分たちで納得する、それによって自分たちのアイデンティティーとよく言っていますけれど、自分たちは何なのか、どこから来たのか、自分たちとはどういう存在なのかということをおみんなで学びあう、そういうエコミュージアムです。網がかかっている範囲がエコミュージアムとして設定されている地域ですけども、上半分がノルウェー、下半分がスウェーデンということですよ。これが国境の端なのですよ。川のようなフィヨルドの切り込み、峡谷にかかった橋がちょうど国境の上にかかる橋になっていますが、この橋を物理的に保存するということをエコミュージアムが目的としているのではありません。写真を撮らなければならないとしたらどこかを撮らなければならないので撮ったものですよ。

ここに象徴される国境という目に見えない線、それがその周辺の地域の環境とか生活、社会というものにどういう影響を及ぼしたかということがここのエコミュージアムのテーマになっています。

ですからここで保存する対象は何なのか、国境というものが引き起こした現象、社会というもののなのです。それが保存されるものの対象としてここにあるということです。もちろんそのときの保存というのは今後国境なんてないほうがいいのじゃないかということも言えるわけで、そういうような方向性も含めた保存ということになります。

古いものが必ずしもいいわけではないし、どんどん振り返っていけば国境のない時代にまでさかのぼることができますし、保存というのは対象となるものが歴史によってどんどん変わってきているわけですから、そのうちどれを取り上げていくかというのは基本的にはそこに住んでいる住民たちの考えかた次第になります。

これもデンマークの例ですけれども、ここもある村で、真ん中に池を置いています。普通広場なんかがおかれるのがヨーロッパの造り方なのですが、この村は真ん中に池がおかれている。この池が作られている一つの理由は江戸の話ではないけれども、木造住宅で火事が多い。その火事のための消火用水を村の中に造るという考え方がそもそもの発想だったらしいです。この村というのは実はエコミュージアムで一つの島全体をエコミュージアムにしているところのひとつです。島の中の中心的なこの村、この保存の仕方は右のほうに萱を葺き替えるようなところがありますが、建物自体も造り直していますけれども、このときの材料、工法、そして工法に伴う木造の建築の技術そのものも保存していくという考え方になります。そのことによって結果としてはこの池の周りにある村並みというか家並みも、連続した一つの景観というものも保存することができるようになります。他にも、いろいろなものを保存しています、階段の手すりの柵になっているものがありますよね、あれはロクロで作り上げていくもので、木のロクロを回して加工をするようなことを見せているところです。これもエコミュージアムの一つのサイトですけれど、実際に物を作るところを見せるということにより、作るという技術を伝えることができるわけです。できあがった物だけ見せても先ほど言ったようにそこにどんな想像力を働かせると作られる過程まで見えてくるかということと普通の人にはなかなかそういう記憶がありませんから、実際に自分が作り上げたという記憶がないわけですから、そこまで想像することは難しい。その場合このように実演をすることが人によくわからせる方法として有効です。

こんなふうの実演をしてくれることによって木工の技術が保存されていると考えられます。

実は、彼自身はそこで実演をするだけでなく、自分自身がその技術を生かして自分のアトリエを持っています。先ほど見せてくれたのはここから歩いて30秒くらいのところに水車小屋があって、そこが展示場になっています。そこで見せて、歩いて30秒ほどのところにアトリエというか工房を持っているというよ

うな形になっている。彼自身は展示には一人の住民として、そういう専門技術を持った一人の人間として、展示、実演に関わることもしているし、自分自身の生活もこれによって職業になっている、これによって成り立っている。このようなことを考えると街中にいるいろんな職人さんとか仕事ぶりと言うようなものが全部博物館の展示の対象になることができるかと思います。

この写真はわかりにくいのですが、左半分と右半分では大分景観が違うと思います。もともと現実には右半分も左半分のように木がたくさん生えてしまっていました。この木は最初植林によって作られた林なんですけれども、左側はそのまましてあって右側はこの木を全部伐採して、実は右側は古代の農場を再現しているところです。古代の農場を再現するというのは大変なことで、今育ってしまった木を一旦白紙の状態に変えて、古代の農場ということは古代の農法を使う、古代の遺伝子をもった牛を飼うと言っていましたけど、そういう6,000年前の農業方法を実践しているのが2人の兄弟で、この農業をしている人たちです。彼らがこの農場を自分たちで学習の場として提供して、かつ自分たちもその農法によって生産物を上げて生活をしているわけです。

エコミュージアムはそこに専門的知識をどこかの博物館とか研究所から持ってきて実践する人たちに受け渡しをする。実践した人たちの活動を地域の人たちにいろいろ呼びかけてこういうふうに草刈を地域総出でやるとかというようなことが行われます。それが保全の一つの形ですね。

次に、ここはノルウェーの、町並み自体が世界遺産になっている町です。この町では何があったかという産業としてかつて栄えたのは銅が採れた銅の町なのです。まあ足尾銅山のようなものだと思いますけれども。足尾もそうだったのですが環境汚染が激しくなり、鉱害ですね、その銅山の採掘会社が閉鎖された。その基幹産業が今はなくなった状態の町です。ですがその羽振りがよかった時代に栄えた建物といってもあそこに見られるような赤っぽい木造の建物ですけれども、そんなものが町並みとして大変よく保存されているので世界遺産になっています。

ここも町自体がエコミュージアムになっていまして、エコミュージアムとしてはここでいろいろなものを保存しようと考えているわけです。その中でこのボタ山ですね、汚染された廃土によってこれが汚染源になったのですが、この草が生えないボタ山を保存したい。ところが左のほうに草が生えてきているのがわかると思いますが、自然の回復力はかなり強い。実際に草が生えてきました。これをどうしようかとこの町のエコミュージアムは真剣に悩んでいるところです。汚染された土砂の汚染の状態が改善されればまあいいことだろうとみんな感じるわけですが、そうではなくて、この町というものがそもそもどういう成り立ちでできてきたのか、住んでいる人たちは過去の歴史の何を土台に生きているのかというようなことを考えたときに、いわゆる負の遺産として、自分たちの町でこういうことがあったというその事実を景観として見せ



るために、この緑が生えない場所というものが記憶を呼び戻すために非常に重要な保存対象であるわけです。それをこのエコミュージアムではどういう形で保存していけばいいかということをお悩んでいるところです。放っておくとまた回復していくわけですね。こういう負の遺産も保存の対象になりうるんだということです。

ここでは展示室があって、環境問題に深刻な展示がたくさんされています。たとえばこれなんか髑髏マークがあるんですが、もう大分昔のことになってしまいましたけれどチェルノブイリの原発の事故がありましてそのときに風の流れによってどういう地域が汚染されたかというようなことが展示されていて、ヨーロッパにある原発の赤いプロットがあるわけですが、黒い点がちょうどノルウェーの場所です。原子力発電の危険性と、それによる事故による被害を見せて環境と人が作り上げてきた行為とそれによる危険とが汚染というようなものをテーマにしてこの町の人たちは今いろんなことを考えている。そういうのがエコミュージアムとしてあるわけです。

それから最後の展示・教育普及と言うようなことについての例をお見せしたいと思います。博物館の展示というところと一般にいろいろなものがあります、エコミュージアムというのは基本的にそこに住んでいる住人が中心になっていろいろな活動をやっていくわけですから、基本的には手作りでもいいわけですね。

手作りのこんな展示も簡単なようであり、よく考えられたものだなと思うのは単に木の年輪があってその年にどういう事柄がおきたかというのをただ展示しているだけです。これを成り立たせるためにはその地域に生えている木を切らないといけません。何年くらいの太さの木を選ぶかということをお皆で相談して、じゃあどこそこのだれだれさんの林から木を切つてこようというようなことでそれを輪切りにして、年輪を数えてそこで行われてきたいろんな事実を書き込んだり、写真に関して住民からの提供でこの写真が作られたわけです。すべて手作りで住民自身の持ち寄りによる提出ということです。こういうようなものを基本に考えればいいと思います。

エコミュージアムの各部分でいろいろな活動が行われているわけですからその活動の資金がたくさんあるところもあれば、民間が補助をしてくれるところもあるし、そうじゃないところもある。それぞれに応じて自分たちで展示をしていけばいいのだと思います。展示というのはこういうふうには手作りでもいいわけですし、展示をするという行為そのものが重要なわけです。結局自分達が学んだ知識、考えていることを表現すると言う手段の一つが展示ですから、展示だけをそんなに立派にする必要もないし、展示で終わるわけでもなくて展示することによって周りの人がこれについて学んでもらって別のことに気がついた人からの指摘をもらうということで、この展示をきっかけとして、さらにまた調査研究が進んだり、保存すべき対象が見つかったりするということです。ですから展示ホールというようなあまりに立派な展示場を作るとそれだけで安心してしまふことが多いわけですが、こういう手作りということが基本的にはいい結果を生むのではないかと思います。

これは一見なんだかよくわからない、いかにも古臭い感じですけど、昔の学校の教室を再現したものです。これも壊される教室の古いものを持ち寄って環境展示というか全体展示をする、これは物だけを展示するのではなく空間として展示することで、この場の雰囲気伝わっていくということです。

これなんかは70～80年前の労働者の住宅内部を再現しているものです。江戸東京博物館とかにありそうですがこの内部の展示ということはどこでもありそうな感じがしますが、これは、ベルギーのエコミュージアムで、石炭が産出されたときは大変栄えた炭鉱の町です。そのころに大量に労働者が集中してそのための労働者住宅を炭鉱会社で作りました。その建物はいまだに残っています。人口は激減していますので、空き家がたくさんある。その炭鉱会社はつぶれてしまっているし、この建物を自治体が安く買い取り、あるいはただで借りたのかもしれませんが、公営住宅として市民に提供しているのです。その中の一住戸が先ほどのように展示室になっているということです。ですから現地にそのまま保存するというのです。それがエコミュージアムの基本的な考え方で何気ない町並みの中に展示が行われている。

これはフランスの紡績工場ですが、紡績工場で働いていた人が退職後こういう形で、今は一住民としてボランティアで解説するということになっています。もちろん長年働いていたわけで機械の操作やなんかもよく知っているのこの人自らが動かしてくれる。

これは中世時代の技術を再現しているところですけど、これも歴史愛好家みたいな人がいましてそういう人が手作りで当時の、これは鍛冶屋さんですね、その当時の技術を専門家と一緒にあって作りあげてそれをみんなに見せるということになっています。基本的には何かを作り出す作業とか工程とか技術というようなものを保存しようと考えて、博物館の中と違って、動かして、作りあげていくことを重視しているのがエコミュージアムです。

それからガラス職人とかがありまして似たような形でやっています。当然教育ということに関わってくるわけで、子供達が見に来る場所にもなっています。あちこちでエコミュージアムに行くと子供達がこういう形で町の中に繰り出してきてこういう場所を活用している。子供だけでなく大人の学習会も頻繁にされている。

展示で言いますと、古いものだけではなく、このような現代の芸術作品も古い遺産の採掘所に置いて見せる。

それから展示の別の形態になりますが、住民自らが演劇を公表することもやっています。

これはその地域で起きた歴史的な事実、歴史的な出来事を題材にして自分達でシナリオを作って住民自らが役者となってそれを発表する。周りに集まってき

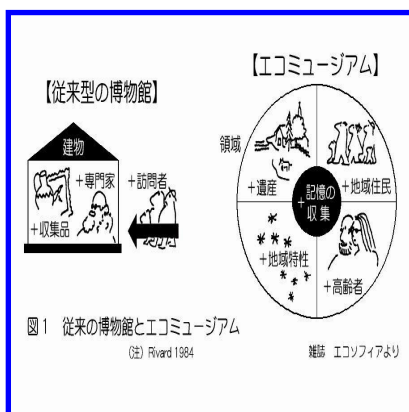
ている人々はそのエコミュージアムの地域の別の村からの人たちです。ここも昔修道院があった跡で礎石しか残っていない場所ですけれども、ここで修道院であった出来事を自ら演じている。その場所で、その固有の歴史について、そこに住んでいる人たちが自ら演じて、それを調べた結果ですよね、調査をした結果あるいは歴史的な事実をそこで再現したり発表する、これも一種の展示、教育普及の一つになるわけです。

このような形で演じるというようなことも方法の一つだし、ガイドブックを作っていくというのもまた一つの方法です。手作り展示でいうとこれはアジェンダ21というローカルアジェンダ作り、地域の環境に関する課題を自分達で見つけて行動計画を立てていくという一連の地域のローカルな活動の中で自分達が手作りの展示をする。例えばこれは今普段食べている食べ物がどういう地域が産地になって来ているのかということをごんなような形で自分達が持ち寄って作り上げた。これは住民自らが自分達の関係を考え直す学習会の発展系としての展示です。これを見ることによって子供達がまた理解をして学習してくれるということです。

若い人達にも積極的にアピールして若い人たちの文化というものもそれを自分達で作って上げて展示して発表するという事も行われたりしています。地域にあるいろいろな場所そのものを展示して、歴史的なものであったり、かなり新しい近代の建物なんかを日を決めて住民が説明をすることも行われています。

\* クリックすると、大きい画像を表示します。

[\\* クリックすると、大きい画像を表示します。](#)



## 従来の博物館とエコミュージアム